

『古今集』離別の部の構造

平 沢 竜 介

本稿で対象とするのは、離別の部の歌、すなわち国歌大観番号365から405までの歌である。松田武夫は、この離別の部を第一歌群から第九歌群までの九つの歌群に分けて考える。⁽¹⁾ 本稿も松田の分類に従って、離別の部に収められた歌を第一歌群から第九歌群に分けて考察してみることにする。

第一歌群は、次の四首である。⁽²⁾

題しらず

在原行平朝臣

365 立ち別れいなばの山の峰におふる松とし聞かばいま帰り来む

読人しらず

366 すがる鳴く秋の萩原朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ

367 限りなき雲居のよそに別るとも人を心におくらさむやは

小野千古が陸奥介にまかりける時に、母のよめる

368 たちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきなどめそ

この歌群は、前半二首と後半二首がそれぞれ対をなしている。前半二首の一首目365は旅立つ人が別れに際して詠じた歌で、都に残る人が待っているという聞きにすぐにも帰ってこようと詠ずるのに対し、二首目366は旅立つ人を見送る人物が詠じた歌で、「いつとか待たむ」という表現が、

365の「待つとし聞かばいま帰り来む」に対応する。後半二首の一首目367は旅立つ人が遠く別れても「人を心におくらさむやは」と表現するのに対し、二首目368は旅立つ人を見送る立場の者が「心ばかりはせきなどめそ」と訴える点で対応する。

この歌群の一首目365の作者、在原行平は弘仁九年（八一八）に生まれ、寛平五年（八九三）に没しており、六歌仙時代の歌人とするのが適切であろう。365も『文徳天皇実録』斉衡二年（八五五）正月十五日条に「從四位下在原朝臣行平為因幡守」という記録があることからすると、その時詠じられた歌と考えられる。行平の歌が離別の部の巻頭に配置されたのは、行平が漢詩、和歌ともに優れた人物であり、「立ち別れ」の歌が別れてもすぐにでも帰ってきたいと、離別に際しての最も本質的な気持ちを表現し、離別の部の冒頭を飾るにふさわしい風格を備えていたことによるのであろう。また、366、367の読人しらず歌を離別の部立の最初の部分に配そうとした場合、366と対をなす詠歌時期の比較的早い歌であるという点も考慮されたかもしれない。二首目、三首目366、367の作者、詠歌状況は不明とする他ないが、366は恐らく妻が旅立つ夫に対して詠みかけた歌、367は旅立つ夫が妻に詠みかけた歌と解するのが妥当であろう。

この二首は共通した言葉を使用しておらず、贈答歌とは考えがたいが、二首の内容は旅立つ人を見送る女性とそれに対する男の歌といった趣を示し、贈答の雰囲気は漂わせる³。四首目368の作者、小野千古の母は伝未詳であるが、息子千古がさほど高い身分でないにもかかわらず名前を記されており、かつ地方官として赴任するほどの年齢に達していることを考慮すると、千古は撰者時代の人物で、その母は六歌仙時代の人物と推定される。これも365同様、367の読人しらず歌と対をなすということ、および詠歌時期の比較的早い六歌仙時代の人物の歌ということで、この位置に配されたと考えられる。365から368までの第一歌群は、読人しらず歌二首を歌群の中央に置き、それに対応する六歌仙時代の歌人の歌をその前後に配した歌群と見ることができよう。

なお、この歌群は、旅立つて行く人の歌とそれを見送る人の歌が交互に配されると同時に、男から女、女から男、男から女、女(母)から男(息子)へと贈られた歌という順に配列がなされている点も注目される。第二歌群は、次の六首である。

貞辰親王の家にて、藤原清生が近江介にまかりける時に、うまのはなむけしける夜、よめる 紀利貞

369 今日別れ明日はあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき
越へまかりける人によみてつかはしける

370 かへる山ありとは聞けど春霞立ち別れなば恋しかるべし
人のうまのはなむけにてよめる 紀貫之

371 惜しむから恋しきものを白雲の立ちなむのちは何心地せむ
友だちの、人の国へまかりけるによめる

在原滋春

372 別れてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて恋しき東の

方へまかりける人によみてつかはしける

伊香子淳行

373 思へども身をしわけねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

逢坂にて人を別れける時よめる 難波万雄

374 逢坂の関しまさしきものならば飽かず別るる君をとどめよ

松田武夫は、これら六首を第一歌群の四首と比較した場合、「男性と女性双方の立場から詠まれた第一歌群に対し、この歌群では、すべて男性から男性へと詠まれた点に、差異が見出される」と指摘するが³、それとともにこの六首は、全て作者名が記されているという点でも第一歌群と異なっている。

この歌群の一首目369の詞書に見える貞辰親王は、賀の部350番歌の詞書にも

貞辰親王のをばの四十の賀を大堰にてしける日よめる

紀惟岳

350 亀の尾の山の岩根をとめて落つる滝の白玉千代のかずかも

と登場する人物で、清和天皇皇子、母は藤原基経の女佳珠子、貞観十六年(八七四)誕生、同十七年親王となり、延長七年(九二九)に五十六歳で薨じたとされる。藤原清生が近江介になった時期は不明。この一首目と二首目、369、370の作者、紀利貞は、生年未詳。貞観十七年(八七五)小内記、元慶三年(八七九)大内記、従五位下、同四年彈正少弼、同年阿波介、同年没、という経歴の持ち主で、六歌仙時代の人物と見ることができよう。離別の部の冒頭365から368の四首は、六歌仙時代の歌、読人しらず時代の歌二首、六歌仙時代の歌という順で配列がなされていたが、369、370は368の千古の母の歌を承けて、六歌仙時代の歌人の歌を並べたと考えられる。しかもこの二首は、「あふみ」「かへる山」という地名

が、掛詞によって「逢う身」「帰る」という言葉を連想させる点でも共通する。

続く371、372は撰者時代の歌人の歌である。371、372は370とともに「恋し」という語を共有することから、370に連続して配列されたと考えられる。371、372の配列順は、370の「春霞立ち別れなば」という表現と371の「白雲の立ちなむのちは」という表現が類似していることから、371が372の先に配されることになったのであろう。また、371の「惜しむから恋しきものを」という表現と372の「かつ見ながらにかねて恋しき」という表現の類似も注目される。

373の作者「伊香子淳行」と374の作者「難波万雄」は、ともに正確な伝記は不明であるが、『平安時代史事典』によると、伊香子淳行は「生没年未詳。平安前期の官人。近江国伊香郡伊香郷を本貫とする連姓氏族の後裔。宿禰姓か。厚行にもつくる。左衛門尉厚代男。子に厚雄・厚方・行包らがいた。また、第十七代天台座主喜慶の祖父とする説もある。雅楽頭、神祇大副等を歴任。伊香郡には伊香氏の奉斎する式内名神大社伊香具神社があり、当社は昌泰二年（八九九）神幸の祭祀が菅原道真の奏進により始められ、その行事にあたったのが淳行であったとの伝承を有する」とあり、難波万雄も藤原万緒の項目で「生没年未詳。藤原豊成の五世孫。参議保則男。万男、万雄とも記す。『古今』に一首入首（三七四）。従五位下右中弁に至る。豊成が難波大臣と号したことにより、難波万緒とも呼ばれた」とあり、ともに撰者時代の人物であったことが推定される。この二首の配列は、373が372と「思へ」という表現を共有することから、373が374の前に置かれたのであろう。また、373の「心を君にたぐへてぞやる」という表現は、第一歌群の終わりから二首目367の「人をおくらすむやは」という表現と対応し、374の関所が別れて行く人を

留めてくれという内容は、第一歌群最後の歌368のわが子に添えてやる心だけは関所で留めないでほしいという歌の内容と対応することも注目される。さらに、374の「逢坂」という地名から「逢ふ」という言葉を連想する発想は、第二歌群の一首目369、二首目370の「あふみ」から「逢ふ身」「かへる山」から「帰る」を連想する発想と対応する点も留意される。

第三歌群は以下の歌で構成される。

題しらず

読人しらず

375 唐衣たつ日はきかじ朝露の置きてしゆけば消ぬべきものを

この歌は、ある人司を賜りて、新しき妻につきて、年経て住みける人を捨てて、ただ、「明日なむ立つ」とばかり言へりける時に、ともかうも言はで、よみてつかはしける常陸へまかりける時に、藤原公利によりてつかはしける

寵

376 あさなけに見べき君とし頼まねば思ひたちぬる草枕なり

紀のむねさだが東へまかりける時に、人の家に宿りて、暁いでたつとて、まかり申ししければ、女のよみていだせりける

読人しらず

377 えぞ知らぬいま心見よ命あらば我や忘るる人や訪はぬと

これら三首の作者はいずれも女性で、かつ妻や愛人だった女性が相手の男に贈った歌という点で共通するが、これは第二歌群の歌がいずれも男性の作で、かつ旅立つ男性に送った歌であるのと、明らかに性格を異にする。

この三首は、375、377が旅立つ男に都に残る女が贈った歌であるのに対し、376は旅立つ女が都に残る男に贈った歌ということから、独自の詠歌状況を持つ376を中心にその前後に相似た詠歌状況を持つ二首を配した左

右対称の構成を持つ歌群と考えられる。その際、376の歌に「きみとし」「ひたち」という人名や地名が、物名として詠み込まれていることも考慮されたかもしれない。また、この物名を用いた376は、第二歌群の一、二首目、369、370および第二歌群の最終歌374の地名に掛詞を用いている歌と対応すると見ることもできよう。

一首目375は、377が歌の詠み手は不明だが、歌を贈られた人物から、撰者時代の歌であることが判明するのに対し、375は読人しらず時代の歌であることからこの歌群の最初に置かれたのであろう。二首目376の詞書に見える藤原公利は、『尊卑分脈』によれば、父は中納言山陰、母は筑前守有孝女で、従四位下但馬權守と注され、父や子の生没年やその他の記録から、九世紀半ば以降に生まれ、延喜二年六位藏人、同五年備中介、同十二年備前權介、延長六年頃山城守を歴任、承平五年まで生存していたことが確認される⁽¹⁾。山下道代は、寵は従五位上という身分を持ち、宮廷女官であったことから、公利と寵の関係は公利が六位藏人で殿上に奉仕していた時期に生じたもので、376は公利の藏人時代に詠まれたものと推定する⁽²⁾。三首目377の詞書に見える「紀のむねさだ」に該当しそうな人物は、『尊卑分脈』『群書類従』『続群書類従』に収められる「紀氏系図」によれば、紀長谷雄の孫の「宗定」と貫之の兄弟の「宗定」の二人がいる。山下道代は、延喜五年における両者の年齢の推定より、377の詞書に見える「紀のむねさだ」は貫之の兄弟の「宗定」であろうと推定する⁽³⁾。穏当な見解であろう。なお、各種「紀氏系図」は全て貫之の兄弟の「宗定」に伯耆守と注記する。

あひ知りて侍りける人の、東の方へまかりけるを送るとてよめる
ふかやぶ

378 雲居にもかよふ心のおくれねば別ると人に見ゆばかりなり

友の東へまかりける時によめる 良岑秀崇

379 白雲のこなたかなたに立ち別れ心を幣とくどく旅かな

陸奥国へまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

380 白雲の八重にかさなるをちにも思はむ人に心へだつた

人を別れる時によみける

381 別れてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ

あひ知りける人の越国にまかりて、年経て京にまうできて、

又帰りける時によめる 凡河内躬恒

382 かへる山なにぞはありてあるかひも来てもとまらぬ名にこそあり

けれ

越国へまかりける人によみてつかはしける

383 よそにのみ恋ひやわたらむ白山の雪見るべくもあらぬわが身は

音羽の山のほとりにて人を別るとてよめる

つらゆき

384 音羽山木高く鳴きて郭公君が別れを惜しむべらなり

第四歌群は、右にあげた378から383の七首である。これらは全て旅立つ男性に都に残る男性が贈った歌という点で共通する⁽⁴⁾。とするとこの歌群は、先の369から374の第二歌群と類似する。ただし369から374の第二歌群では、369、370が六歌仙時代の歌人の歌で、369では歌を贈った人物ばかりでなく、歌を贈られた人物の名前も明らかにされているのに対し、この歌群に収められた歌は、全て歌を贈られた人物の名は不明だが、歌を贈った人物の名前は明らかで、いずれも撰者時代の歌人である。

この七首のうち、378から380は三首全てが「心」という語を含み、かつ「雲居」「白雲」「白雲」と相似た表現を有していることから、一つのま

とまりをなしていると考えることができよう。また、382から384は「かへる山」「白山」「音羽山」といずれも山の名が詠み込まれており、これらも一まとまりの歌群と見ることができよう。とすると、378から384の第四歌群は、381を中心にその前に「心」「雲」という語を詠み込んだ歌群、その後山の名を詠み込んだ歌群が配置されるという構造となっていると理解される。

378、379はいずれも「東」の方に旅立つ人に贈った歌という詞書を有しており、直前の377の「紀のむねさだが東へまかりける時に、人の家に宿りて、暁いでたつとて、まかり申しければ、女のよみていだせりける」という詞書と、東の方に旅立つ人に贈った歌という点で共通することから、この位置に置かれたのであろう。また、378、379の配列順は、379が380と「白雲」という語を共有し「こなたかなた」と「をち」という類似した表現をもっていることから、379が378の後に置かれることになったのであろう。因みに、379の作者良岑秀崇は生没年未詳、「古今和歌集目錄」によると、元慶三年（八九六）文章生に補され、同七年但馬掾、同八年治部少丞、仁和四年（八八八）兵部少丞、寛平三年（八九二）兵部大丞、同八年従五位下、伯耆守、という経歴を持つ。382から384までの配列は、384が郭公を、続く385がきりぎりすを、それぞれ別れを惜しんで鳴いているようだと表現していることから、384が385の直前、すなわち、三首の歌の一番最後に配されたと考えられる。382と383は同一作者が同一人物に宛てて詠んだ歌の可能性が高いが、382が別れに際しての歌であるのに対し、383は別れた後に贈った歌ということで、382、383の順に配されたのであろうか。

続く第五歌群は、次のような歌で構成される。

藤原後蔭が唐物の使ひに、長月の晦日がたにまかりけるに、

うへのをのことも酒たうびけるついでによめる

藤原兼茂

385 もろともに鳴きてとどめよきりぎりす秋の別れは惜しくやはあらぬ

平元規

386 秋霧のともに立ちいでて別れなばはれぬ思ひに恋ひやわたらむ

源実が筑紫へ湯浴みむとてまかりける時、山崎にて別れ惜し
みける所にてよめる

しろめ

387 命だに心になふものならばなにか別れの悲しからまし

山崎より神奈備の森まで、送りに人々まかりて、帰りがてにして別れ惜しみけるによめる

源実

388 人やりの道ならなくにおほかたはいき憂しといひていざ帰りなむ
「今はこれより帰りね」と実が言ひける折によみける

藤原兼茂

389 したはれて来にし心の身にしあれば帰るさまには道も知られず

藤原のこれをかが武蔵介にまかりける時に、送りに逢坂を越ゆとてよみける

つらゆき

390 かつ越えて別れもゆくか逢坂は人だのめなる名にこそありければ
大江千古が越へまかりけるうまのはなむけによめる

藤原兼輔朝臣

391 君がゆく越の白山知らねども雪のまにまにあとは尋ねむ

この歌群は、旅立つ人物も、見送る人物も、ともに名前が記されている点で、見送る人物の名前だけが明記されていた、先の378から384の第四歌群とは異なる性格を示す。第五歌群の最初の二首385、386は、詞書にもあるように、藤原後蔭が唐物使で太宰府に旅立つ際詠まれた歌であるが、

この二首がこの歌群の最初に配されたのは、先にも述べた通り直前の歌群の最後の歌が、

音羽の山のほとりにて人を別るとよめる

つらゆき

384音羽山木高く鳴きて郭公君が別れを惜しむべらなり
というように、別れの悲しみを郭公の鳴き声に託して詠んだ歌であるのに対し、385の藤原兼茂の歌が別れの悲しみをきりぎりすの鳴き声に託して詠んでいるところから、385が384の後、すなわちこの歌群の冒頭に置かれることとなり、その結果385と同じ時に詠出された386が、この歌群の二首目に配置されることになったのであろう。

387から389の歌も源実が筑紫へ湯浴みに行く際に詠まれた歌ということで一まとまりをなす。これらの歌は、385、386の歌が西国への旅であることを承けて、同じ西国である筑紫への旅に際して詠まれた歌を続けたと考えることもできよう。しかし、この歌群七首全体を見渡した時、387から389は七首の中央を占め、かつ387から389の三首は、これから旅に出る源実の歌を中心に、その前後に実を見送る人々の詠歌を配するという構成となっており、かつ387から389の歌群の前後にある二組の二首の歌群は、それぞれ旅立つ男性に見送る男性が贈った歌で構成されている。とすると、この七首の配列は、388の源実という旅立つ人物の歌を中心に、その前後に旅立つ人々を見送る人々の歌を配した構造となっていると思われる。しかも、388のすぐ外側の387、389は中心となる歌の詠み手、実を見送る歌という点で対応する。またその外側の385、386の二首と390、391の二首は、歌の内容という点では対応関係を見出しがたいが、いずれも都を後にする男性に、都に残る男性が贈った歌で、かつ見送る人物も見送られる人物も名前が判明するという点では共通する。とすると、この第四歌群七

首は、388を中心に左右対称の構成が取られていると考えられ、385、386の後に387から389の三首が配列されるのは、歌群の構成上必然ということになる。なお、387は山崎で詠まれた歌、388は山崎から神奈備の森まで実とそれを見送る人々が行った時点で詠まれた歌、389も388と同じ時点で詠まれた歌であろうが、実が送って来た人々に別れを告げた時の歌ということで、388の後の詠と想像されるから、387から389は、時間の推移に従って配列がなされていると考えられる。

この第五歌群の最後の二首390と391は、この第五歌群の直後の第六歌群が、

人の花山にまうできて、夕さりつかた、帰りなむとしける時

による 僧正遍照

392夕ぐれの籬は山と見えなむ夜は越えじと宿りとるべく

山にのぼりて、帰りまうできて、人々別れけるついでによめる 幽仙法師

393別れをば山の桜にまかせてむとめむとめじは花のまにまに

雲林院の親王の舍利会に山にのぼりて帰りけるに、桜の花のもとにてよめる 僧正遍照

394山風に桜吹きまき乱れなむ花のまぎれにたちとまるべく

幽仙法師

395ことならば君とまるべくにははなむ帰すは花の憂きにやはあらぬ
というように、山を舞台に詠まれた歌で始まることから、「越の白山」を詠じた兼輔の391の歌が最後に置かれ、それに伴って貫之の390の歌がその前に置かれることになったのであろう。なお、390は「逢坂は人だのめなる名」と、逢坂という地名から逢うことを連想した歌となっているが、これはこの第五歌群の直前の378から384の第四歌群の終わりから三首目382

が、「かへる山」から帰るを連想しているのに対応する。また、391は越の白山の雪を詠じているが、これは第四歌群の最後から二首目の歌383が同じく越の白山の雪を詠じていることと対応する。先に、第四歌群の最後から三首目、二首目の382、383の配列は、「382が別れに際しての歌であるのに対し、383は別れた後に贈った歌ということで、382、383の順に配されたであろう」と推測したが、390、391の配列が右に見たような理由で決定されたとする、382、383の配列も390、391の配列を意識して配列されたと見た方がよいように思われる。

因みに、この第五歌群のそれぞれの歌がいつ詠まれたについて調べてみると、藤原後蔭が唐物使に遣わされた年次は不明だが、山下道代は、承平五年（九三八）蔵人藤原親盛が唐物使として下る時、蔵人所の人々が歌を詠んだ例があることから、「もし、唐物使には蔵人が任せられるものであったとするならば、後蔭は醍醐朝始発時から延喜二年（九〇二）正月まで六位蔵人であった。後蔭の送別酒宴を「うへのをのこども」が催したということも、このとき後蔭が蔵人であって殿上の身分を有していたから、と見ればわかりやすい。このようなことから、右の二首（385、386のこと）が詠まれたのは、寛平九年から延喜元年までのいずれかの秋、と考えてよからう」とする。また、『国史大辞典』によると、唐物使は九州に唐船が来航した時、「はじめは右弁官、後には蔵人所の官人から交易唐物使を任命して大宰府に派遣」したとされており、山下の指摘するように、385、386の二首は藤原後蔭が蔵人在任中のいずれかの秋に詠まれたということになる。385の作者藤原兼茂は寛平九年から昌泰四年正月まで六位蔵人、386の作者平元規は延喜五年（九〇五）以前に蔵人とはなっていないが（元規は延喜六年から同八年まで六位蔵人を勤める）、父平中興が昌泰元年から延喜四年まで六位蔵人を勤めており、

父の縁でこの送別の宴に加わったのであらう。とすると、385、386の二首は、兼茂および平中興の蔵人在任の期間より、上限と下限を山下の推定より一年ずつ縮めて、昌泰元年から昌泰三年の間に詠まれたと推定される。

387から389の三首は、源実が筑紫へ湯浴みに行くに際しての見送りの人々と実の贈答から成る。源実は、嵯峨天皇の曾孫、祖父は参議源明、父は参議源舒で、元慶四年（八八〇）左兵衛少尉、寛平三年（八九一）六位蔵人、同六年従五位下、寛平九年従五位上、左近衛少将、五位蔵人、昌泰二年（八九九）信濃守、同三年没、という経歴を持つ。山下道代は、昌泰二年の蔵人解任について、「おそらく源実は、このとき出仕に耐えられないようななにかの疾病を持っていた、それがために五位蔵人から信濃守に移され—もちろん遙任である—、医師の指示による治療のため筑紫へ「湯浴み」に下ることになったものであらう。（中略）そして、この推測があたっているとすれば、この三首の歌の詠まれた山崎での別れは、昌泰二年のできごとであつたろうと考えられる」とするが、この推定はかなり蓋然性の高いものと考えられる。実を送る歌を詠んだ「しるめ」は『古今和歌集自録』には、「大江玉淵女云々。遊女也。任二（住歟）摂津江口辺一云々」とあり、江口あたりの遊女であつたらしく、山崎での実の送別の宴に呼ばれていた遊女の一人であつたのであらう。藤原兼茂は、先にも述べた通り寛平九年から昌泰四年正月まで六位蔵人を勤めており、実の同僚（元同僚）であつた。

390の歌の詞書にある「藤原のこれをか」が、武蔵介になったのは、『紀家集』によると、昌泰元年十月二十日となる。実際に任地に赴いたのは、翌昌泰二年頃であつたかもしれぬ。

391の大江千古は、延喜元年（九〇一）方略試、式部丞、伊予権守など

を経て、従四位上式部大輔に至り、延長二年（九二四）没⁸³。大江千古が延喜五年以前に越の国に赴いたとの記録は見出せない。詞書に「大江千古が越へまかりけるうまのはなむけによめる」とあって、どこの国司に任命されたと書かれていないことからすると、391は地方官に転出したのではなく、何らかの用事で越に旅立つ時に詠まれた歌であったかもしれない。この歌の詠まれた年次は不明とする他ない⁸⁴。

第六歌群は以下の歌から成る。

人の花山にまうできて、夕さりつかた、帰りなむとしける時
によめる 僧正遍照

392 夕ぐれの籬は山と見えなむ夜は越えじと宿りとるべく

山にのぼりて、帰りまうできて、人々別れけるついでによめる
幽仙法師

393 別れをば山の桜にまかせてむとめむとめじは花のまにまに

雲林院の親王の舍利会に山にのぼりて帰りけるに、桜の花の
もとにてよめる 僧正遍照

394 山風に桜吹きまき乱れなむ花のまぎれにたちとまるべく

幽仙法師

395 ことならば君とまるべくにははなむ帰すは花の憂きにやはあらぬ

仁和の帝、親王におはしましける時に、布留の滝御覽じにお
はしまして、帰り給ひけるによめる 兼芸法師

396 飽かずして別るる涙滝にそふ水まさとやしもは見るらむ

先にも述べた通り、この歌群の最初から四首は山で詠まれた歌であり、直前の第五歌群の最終歌391が、越の白山を詠じていることと連続性を有する。また、これら392から396の五首は、歌の詠み手がいずれも僧侶であるという点で、離別の部の他の歌とは明らかに異なっている。遍照が六

歌仙時代の歌人であることは言うまでもないが、幽仙法師も承和三年（八三六）生まれ、寛平二年（八九〇）権律師、昌泰三年（九〇〇）没、という経歴を持ち、六歌仙時代の人物と見てよいであろう⁸⁵。なお、遍照と幽仙はともに慈覚大師の弟子で、「同門の僧侶として叡山にすんでゐたこともあ⁸⁶」り、きわめて近い関係にあったと想像される。兼芸法師は生没年未詳だが、「仁和の帝、親王におはしましける時」すなわち元慶八年（八八四）以前に、親王に歌を奉っているところからすると、六歌仙時代の人物と見てよいであろう。仁和の帝、すなわち光孝天皇と遍照の関係の深さ、および石上の地と遍照との関係の深さについては既に目崎徳衛等の指摘があるが、396の詞書によると兼芸は布留の地に居て、仁和の帝に歌を奉っており、兼芸もまた遍照と何らかの関係を有する人物と推定することができよう。この五首の歌群は、いずれも僧侶の詠んだ歌で構成されており、かつその僧侶は遍照および遍照と関係が深い六歌仙時代の人物であるという特色を持っている。

この五首は、その真ん中の三首、すなわち393から395がいずれも桜の花を詠じているのに対し、その三首の前と後、すなわち392と396は桜の花を詠じておらず、392が籬が山と見えてほしいと詠じ、396が別れを惜しむ涙が滝に落ちて水かさが増さると詠じるように、いずれも誇張した表現を有していること、および392が山を詠じ、396が川を詠じるという点で対応関係を有する。また、五首の中央にある三首も、394の遍照を中心にその前後に幽仙法師の歌を置くというように、

394を中心に左右対称の構成を取る。とすると、この五首は、394の遍照の歌を中心に、その一首外側の393と395が対応し、さらにその外側にある392と396が対応するという左右対称の構造を有していることができよう。

この第六歌群の一首目は、この歌群の左右対称性のみ考慮すれば、392でも396でもよいように思えるが、直前の歌群の最終歌391が、越の白山を詠じていることとの連続性を意識すれば、山を詠じている392がふさわしいということになる。また、五首の歌の作者の中で、僧侶として最も地位が高く、中心的な立場にある遍照の歌を歌群の最初にもってくるということも当然考慮されたであろう。

続く393から395の三首は、先にも触れたように、桜の花を詠じているという点で共通性を持つ。そのうち、394は遍照の歌であり、この五首の中心を占めるべきものであるので、この三首の真ん中の二首目に配されることになったのであろう。393と395は同じ幽仙法師の歌とともに山の桜を詠じているが、393が「やまの桜にまかせてむ」と「山」「桜」という語を詠み込んで、この歌群の一首目392が「山」という語を詠んでいるのと共通性を持ち、またその直後の394と「山」「桜」という語を共有する点で連続性を持つのに対し、395は山の桜を詠んだ歌であることは、394の詞書から明らかであるが、一首の表現の中に山、桜という語は含まれておらず、代わりに394と395は「花」および「とまるべく」という表現を共有する。また、393が「とめむとめじは花のまにまに」と山から帰る人を引き留めるか否かは桜の花に任すという姿勢を示すのに対し、394、395は「花のまぎれにたちとまるべく」あるいは「ことならば君とまるべくにほはなむ」というように、山から帰る人を留めたいという意志を積極的に表明しており、これらの点が考慮されて393が394の前、395が394の後に配されることになったのであろう。また、394、395は詞書より同じ状況で詠まれた歌であることが確認されるが、その場合僧侶として地位の高い遍照の歌が先に置かれるのが自然であろう。最後の396は、布留の滝とその下流の川を詠じている点で、山で詠じられた他の四首とは異なっており、

392がこの五首の歌群の一首目に配された時点で五首目に配されることが自動的に決定されたと考えられる。

なお、394、395の二首が詠まれたのは、遍照が出家した嘉祥二年（八四九）以降、「雲林院の親王」、すなわち仁明天皇皇子常康親王が没した貞観十一年（八六九）以前ということになる。なお『濫觴抄』によれば、天台の舎利会は貞観二年（八六〇）に始まるとされるが、この記事が正しいければ、394、395が詠まれたのは、貞観二年（八六〇）から貞観十一年（八六九）の間ということになる。また、396は詞書に「仁和の帝、親王におはしましける時に、布留の滝御覧じにおはしまして、帰り給ひけるによめる」とあるところからすると、元慶八年（八八四）以前に詠まれた歌ということになる。

僧侶の歌群である第六歌群に続く第七歌群は、次の三首である。

かんなりの壺に召したりける日、大御酒などたうべて、雨のいたく降りければ、夕さりまで侍りてまかりいでける折に、盃をとりて
つらゆき

397 秋萩の花をば雨に濡らせども君をばましてをしとこそ思へ
とよめりける返し 兼覧王

398 をしむらむ人の心を知らぬまに秋の時雨と身ぞふりにける

兼覧王にはじめて物語して別れける時によめる

みつね

399 別るれどうれしくもあるかこよひよりあひ見ぬさきになにを恋ひまし

これは兼覧王と『古今集』の撰者である貫之、躬恒の歌を収めた歌群であり、同じ時、同じ場で詠まれた歌群と推定される。これらの詠歌がいづつ詠まれたかについて、橋本不美男は、『古今集』勅撰に関する醍醐天

皇の内命を貫之ら撰者に伝達した後の酒宴の場を推定し、村瀬敏夫は、延喜四年七月末、後詔による撰歌作業も一段落した頃とする。

この三首も、これまでの歌群同様、左右対称の構成が取られている。

すなわち、この酒宴の主賓にあたる兼覧王の歌を中心に置き、その後撰者の貫之と躬恒の歌が配されるという構造を見て取ることができる。397から399への配列順は、397の歌を承けて兼覧王が398の歌を詠じていることから、必然的に397、398の順序が確定し、独詠的な躬恒の歌は三首の最後に配されるということになったのであろう。

続く第八歌群は次のような歌が配される。

題しらず

読んしらず

400 飽かずして別るる袖の白玉は君が形見とつつみてぞゆく

401 限りなく思ふ涙にそほちぬる袖はかはかじ逢はむ日までに

402 かきくらしことは降らなむ春雨に濡れ衣着せて君をとどめむ

403 しひてゆく人をとどめむ桜花いづれを道とまどふまで散れ

この四首はいずれも、題しらず、読んしらずで、その前後の歌群と詞書、作者名表記を異にしており、一つのまとまった歌群と考えられる。

この歌群は、前半二首と後半二首の二組の対によって成り立っている。前半二首の歌群、すなわち400と401は別れに際しての涙を詠じている点で共通する。400と401は、400が旅立つ人が詠んだ歌であるのに対し、401は旅立つ人を見送る人が詠んだ歌と解される。とすると、この歌群の直前の歌群の

かんなりの壺に召したりける日、大御酒などたうべて、雨の
いたく降りければ、夕さきまで侍りてまかりいできる折に、
盃をとりて
つらゆき

397 秋萩の花をば雨に濡らせども君をばましてをしとこそ思へ

とよめりける返し

兼覧王

398 をしむらむ人の心を知らぬまに秋の時雨と身ぞふりにける

という贈答が、見送る者の歌が先にあり、見送られる者の歌が後になるという構成と、399の歌を挟んで対称的な構造となる。400と401の配列順は、397、398の配列との対照を意識して配列されたと思像される。また、401の「涙にそほちぬる袖」という表現が、402の「春雨に濡れ衣着せて」という表現と類似している点も、400、401という順の配列となる要因となったであろう。

後半二首、402、403の歌群は、402が「春雨に濡れ衣着せて君をとどめむ」と詠じ、403が「しひてゆく人をとどめむ」と詠じるというように、旅に出る人を見送る人物が、旅立つ人を留めようとする気持ちを詠じている点で共通する。402が二首の前に置かれたのは、先にも述べたように、前半二首の後の歌401の濡れた袖と402の濡れ衣という言葉の類似性によると考えられる。

なお、400と401は、直前の兼覧王関係の歌群を飛び越えて、392から396の第六歌群の中の

仁和の帝、親王におはしましける時に、布留の滝御覧じにお
はしまして、帰り給ひけるによめる 兼芸法師

396 飽かずして別るる涙滝にそふ水まさとやしもは見るらむ

という歌と、別れの涙を詠じている点で対応していることと見ることができ
る。特に400は396と「飽かずして別るる」という表現を共有しており、対
応性が顕著である。

また、402は春雨を詠じているという点で、直前の兼覧王関係の歌群の
397、398に対応していると考えることができる。と同時に、402は392から396
の第六歌群のうち、

幽仙法師

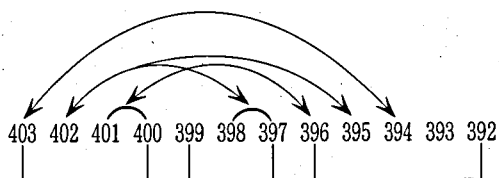
395 ことならば君とまるべくにははなむ帰すは花の憂きにやはあらぬ
 という歌の「ことは」という表現と類似した「ことならば」という表現
 を持ち、402が帰る人を留めるため、春雨に「かきくらしことは降らなむ」
 とあつらえ望むのに対し、395が帰る人を留めるため、花に「君とまるべ
 くにははなむ」と同じくあつらえ望む表現をとっている点でも共通し、
 対応関係を有していると考えられる。

また、403は、帰る人を留めるため「桜花いづれを道とまどふまで散れ」
 と詠ずるが、これは392から396の第六歌群の中の

雲林院の親王の舍利会に山にのぼりて帰りけるに、桜の花の
 もとにてよめる 僧正遍照

394 山風に桜吹きまき乱れなむ花のまぎれにたちとまるべく
 という歌が、帰る人を留めるため「山風に桜吹きまき乱れなむ」と詠じ
 ているのに対応していると考えられる。

見てきたように、392から403までの歌は、第六歌群から第八歌群という
 ように、三つの歌群としてそれぞれまとまりを持ちながら、互いに照応
 関係を持つという複雑な構造を形成していると考えられる。以上の照応
 関係を図示すると、以下のようなになる。



離別の部、最後の歌群、第九歌群は以下の通りである。

志賀の山越えにて、石井のもとにてものいひける人の別れけ
 る折によめる づらゆき

404 結ぶ手のしづくににぐる山の井のあかでも人に別れぬるかな
 道にあへりける人の車にもを言ひつきて、別れける所にて
 よめる ともり

405 下の帯の道はかたがた別るともゆきめぐりても逢はむとぞ思ふ
 これらの歌は、いずれも撰者時代の歌人の歌であり、かつ旅する途中で
 出逢った旅する人々との別れの場面で詠まれた歌という点で共通する。
 この二首は、404が旅の途中で出逢った人との別れを惜しむ気持ちを詠ず
 るのに対し、405は別れても再び逢おうという意欲を詠じており、より將
 来のことを見据えている405が404の後に配されることになったのであろう。
 また、405の「道はかたがた別るともゆきめぐりても逢はむとぞ思ふ」と

いう表現は離別の部の巻頭歌、

題しらず

在原行平朝臣

365 立ち別れいなばの山の峰におふる待つとし聞かばいま帰り来む
の「立ち別れいなば」「待つとし聞かばいま帰り来む」に対応している
と考えることもできよう。³⁶⁵

松田武夫は、この二首は離別の歌であると同時に旅の歌であり、離別の部の終末と羈旅の部の巻初をつなぎ合わせようとする意図のもとに、離別の部の巻末に据えられたものとする。³⁶⁶

なお、松田は離別の部全体を次のように図示する。

第一歌群（男性から女性へ、又、女性から男性へ贈った離別
別歌）

第二歌群（男性から男性へ贈った離別歌）

第三歌群（女性から男性へ贈った離別歌）

第四歌群（男性から男性へ贈った離別歌）

離別歌
第五歌群（贈答の人名を明らかにした離別歌）

第六歌群（僧侶の詠んだ離別歌）

第七歌群（兼覧王関係の離別歌）

第八歌群（題不知読人不知の離別歌）

第九歌群（貫之・友則の旅中の離別歌）

右の九つの歌群は、一見、何の規則性もなく配置されているように見えるが、子細に見ると、これらの配置も整然とした構造を有していることが見て取れる。

第一歌群は、題しらずの歌三首、読人しらずの歌二首と、題しらず、読人しらずの歌を中心に構成されているが、これは第八歌群の題しらず、読人しらずの歌群と対応性を有すると考えられる。第一歌群は、読人し

らず時代の歌二首と六歌仙時代の歌二首から構成されており、純粹に題しらず、読人しらずの歌群とすることはできないが、第一歌群、第八歌群以外の他の歌群が六歌仙時代の歌人の歌や撰者時代の歌人の歌を中心に構成されていることを考えると、第一歌群は古い時代の歌のみを収めた歌群となり、第八歌群と対応すると認めてよいであろう。また、この二つの歌群とともに旅立つ人物の歌と旅立つ人物を見送る人物の歌を含んでいることも注目される。

第二歌群と第四歌群は、ともに旅立つ男性に対してそれを見送る男性が詠じた歌で構成されている点で共通性を有する。第二歌群の一首目³⁶⁹のみが、旅立つ人の名を明らかにしているが、両歌群に収められるそれ以外の歌は、作者名のみを明らかにし、見送られる人物の名前を明らかにされていない点でも共通する。とすると、第二歌群と第四歌群は、妻ないし愛人と思われる女性から男性に贈った離別歌から成る第三歌群を中心に、左右対称の形で配されていると考えられる。第二歌群が第四歌群より先に配されたのは、第二歌群の一首目³⁶⁹が六歌仙時代の歌人の作であるのに対し、第四歌群は全て撰者時代の歌人の歌で構成されていることによると思われる。

第五歌群に収められる歌は、全て歌を贈られる人物と歌を贈る人物の名が明らかにされている歌群である。それ以前の歌群では稀に歌を贈られる人物と歌を贈る人物の名が明らかにされている歌が収められることはあったが、そうした歌は例外的で、多くは歌の詠み手の名だけが記されているもの、稀に贈られる人物の名前だけが記されているもので構成されており、第五歌群は明らかに他の歌群とは異なっている。また、第七歌群も、兼覧王、貫之、躬恒の歌で構成されているから、全て歌を贈られる人物と歌を贈る人物の名が明らかにされているという点では、第

五歌群と共通し、対応関係を有すると考えられる。とすると、この第五歌群と第七歌群は、僧侶の詠んだ歌で構成される第六歌群を中心に左右対称の形で配列されていると考えられる。第五歌群が第七歌群の前の置かれているのは、第一歌群から第四歌群までに収められる歌のほとんどが、都から遠く離れた土地に旅立つ際に詠まれた歌であり、第五歌群もいづれも都から遠方への旅立ちに際して詠まれた歌であるのに対し、第七歌群は、宴席での別れに際して詠まれた歌が収められていることから、第五歌群が第四歌群に続いて置かれ、第七歌群は第六歌群の次に置かれることになったのであろう。

なお、第二歌群と第四歌群に挟まれる第三歌群と第五歌群と第七歌群に挟まれる第六歌群は、その位置を逆にすることも可能に思われるが、第三歌群は女性から男性に贈られた歌ということで、その両脇に位置する第二歌群、第四歌群が男性から男性に贈られた歌で構成されるのと対照をなしており、三番目の歌群として配置されるのが適切と考えられる。また、第六歌群は、花山、比叡山、布留というような都に近い場所から都に帰ろうとする際に詠まれた歌で構成されており、第五歌群までの遠方への旅立ちに際して詠まれた歌群とは異なる様相を呈しており、次の宴席での別れに際して詠まれた歌を収める第七歌群への移行をスムーズなものにしている。このことから第六歌群は、第五歌群と第七歌群の間に置かれることになったのであろう。

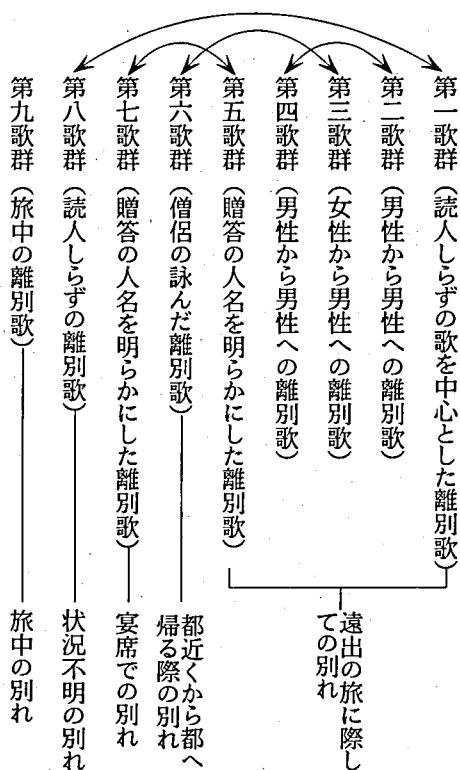
第八歌群の前半二首、400、401は遠方への旅立ちに際しての歌と理解されるが、後半二首402、403はどのような別れに際しての歌か、歌だけからでは想像できず、その点からも第七歌群の次に置かれるのが妥当と考えられる。

第九歌群は、言うまでもなく旅中の別れを詠じた歌で構成されており、

これまでの八つの歌群が、見送る人が普段住んでいる場所で交わされた別れの歌で構成されているのとは、明らかに質を異にしており、また続く歸旅の部との接続を考えると、離別の部の最後に置かれるのが最もふさわしいと考えられる。

なお、第二歌群と第四歌群の軸となる第三歌群と、第五歌群と第七歌群の軸となる第六歌群は、第三歌群が女性の詠んだ歌であるのに対し、第六歌群が僧侶の詠んだ歌ということで、対応関係をもっていることも注目されよう。

最後に以上述べてきた事柄を整理して図示すると、次のようになる。



注

- (1) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』(風間書房、40年9月)
- (2) 『古今集』は『新編日本古典文学全集』に拠る。
- (3) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』385頁。
- (4) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』359頁。
- (5) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』360頁。
- (6) 『平安時代史事典』(角川書店、平成6年4月)
- (7) 『古今和歌集目録』
- (8) 同注5。
- (9) 同注5。
- (10) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』361頁。
- (11) 山下道代『古今集人物人事考』(風間書房、12年3月) 藤原公利。
- (12) 同注11。
- (13) 山下道代『古今集人物人事考』「このむねさだ」をめぐって。
- (14) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』363頁。
- (15) 同注14。
- (16) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』365頁。
- (17) 同注16。
- (18) 山下道代『古今集人物人事考』源実をめぐる離別歌。
- (19) 同注7。
- (20) 同注7。
- (21) 同注7。
- (22) 同注18。
- (23) 同注6。
- (24) 391番歌は、『大和物語』七十五段に
おなじ中納言、藏人にてありける人の、加賀の守にて下りけるに、わか
れ惜しみける夜、中納言
君がゆく越の白山知らずともゆきのまにまにあとはたづねむ
となむよみたまひける。
という形で収められている。大江千古が藏人であった時期は不明。

(25) 同注7。

- (26) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』369頁。
- (27) 目崎徳衛『平安文化史論』(桜楓社、43年11月) 僧侶および歌人としての遍
照。片桐洋一『古今和歌集全評釈』(講談社、10年2月) も
僧正遍昭は、周知のように、親愛をほしきままにしていた仁明天皇の崩
御にあって出家して仏門に入った人であり、その仁明天皇の皇子であつ
た時康親王(後の光孝天皇)と特別の関係があったことは、二四八番歌
や三四八番歌でも述べた通りである。この歌と二四八番歌の詞書に見え
る「布留の滝御遊」も遍昭やその息の素性法師も住んでいた石上布留の
地へ招待されたことであつただろうと思うが、布留の滝近くに住んで
いた作者兼藝法師もおそらくは遍昭ゆかりの人として石上寺に住んでい
たのではなかったかと思う。三九二番歌からここまで僧正遍昭にかかわ
る歌が並べられていたのである。
と指摘する。
- (28) 片桐洋一『古今和歌集全評釈』
- (29) 橋本不美男『王朝和歌資料と論考』(笠間書院、平成4年8月) 第一部、第
一章、宮廷の詩人たち―宮廷史の世界を中心に―、村瀬敏夫『紀貫之伝の研
究』(桜楓社、56年11月) 第二章、(11)。
- (30) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』373頁。
- (31) 同注30。
- (32) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』374頁。